

ひろば

平成17年2月24日発行

発行人 田沼武能 阪川武志

〒164-8678 東京都中野区本町2-9-5 電話 (03) 3372-1321

細江英公・近況報告①

ひろばのページ⑤

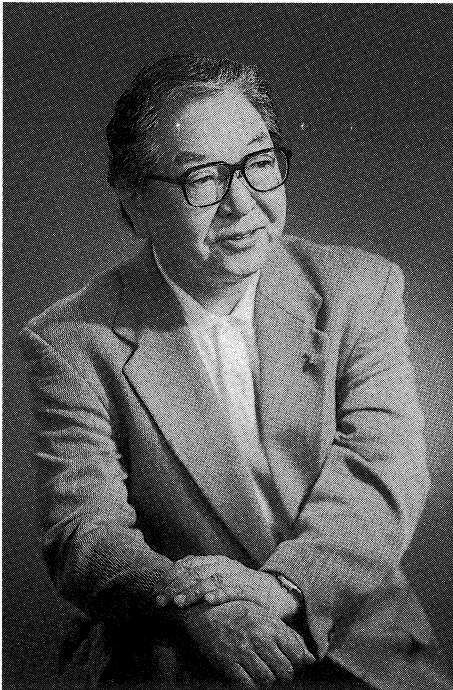
芸術別科の一年間⑥

「平成16年度芸術学部卒業・大学院
修了制作展」開催のお知らせ⑧

「同窓会沿革史」編集よりお知らせ⑨

細江英公・近況報告

写真技術科29期 細江英公



平成15年(2003)3月末をもって70歳、東京工芸大学芸術学部写真学科の教授職を無事定年退職しました。昭和49年4月に東京写真短期大学の教授の職を得てから28年間の教師+写真家の二人三脚がよく勤まったものです。大学に関わったのは関一教授と菊地真一学長からの要請によるものでした。かなり悩み熟慮したあと教授職を引き受けるに当たっては出た条件が二つありました。一つは、学内に写真作品を常時展覧できるギャラリーをつくってほしいこと。そこは学生ばかりでなく学外の一般の人たちにも開放された展覧会空間であること。二つ目は、優れた内外の写真家の作品(オリジナルプリント)を収集し学生の教育に活用することでした。関教授も菊地学長も快く受け入れてくださいました。ギャラリーの企画、運営、そして作品収集

の責任は私が担うことを約束しました。そのとき大学からは「定期的な授業を受け持たなくてもよいから」という条件をいただきました。

アメリカの大学にはリサーチプロフェッサーというのがあって、教育よりも研究だけをして、それが大学のため大きくは人類のためという夢みたいな制度があるときいていたので、これがそれだと喜びました。しかしそれは東の間のこと、一年後に初めての卒業式に出席したときの寂しさは忘れません。理由は簡単です。教授といつても授業をしなければ学生の顔を見てもまるでわからないし、学生から見ても赤の他人がそこにいるという関係だからです。それが2年続いたときに我慢がならず、関先生に「写真芸術学」という講座を創設して定期的に教えたいという提案をしました。一週間に一コマ、写真学科2

年生の必須科目として、42番教室という大教室で教えることになりました。海外での仕事がある時以外はほとんど休講はしませんでした。おもしろい授業だといって学外からの特別聴講生が何人も大教室の片隅でまじめにノートを取っている姿を見えています。千葉

支部より連絡

北海道支部長に

筒淵美允氏(37期)

前支部長 宇野均(平成14年5月26日逝去)の後任支部長は、平成17年1月1日から筒淵美允(37期工業科卒)が就任しました。

なにとぞ宜しくお願いいたします。なお、事務等の連絡先は、左記のとおりです。

筒淵美允(つつぶち・よしみつ)

〒065-0025

札幌市東区北25条東16丁目4-16

TEL・FAX 011-781-3972

y.tsutsu-shizu@lapis.plala.or.jp



「春本・浮世絵うつし」パリ展会場のオープニングレセプションでのパフォーマンスのフィナーレ。左より玉野黄市、細江英公、カルロッタ・池田。2004年9月23日

ちを叱咤激励する授業を心掛けました。

1975年、「写大ギヤラリー」は取り敢えずそれまでであった既存の学生作品展示室を改装して出発しました。最初の第1回展は「ウイン・バロック展」でした。最初だからということでカリフォルニアからウイン・バロックを招いて講演会とワークショップを企画しましたが、ガンの手術の後のため残念ながら難しいということでした。初来日はなりません。でも

展覧会は大成功で、日本初公開のオリジナルプリントの素晴らしさは多くの学生ばかりでなく一般の観客を魅了しました。大学としても森の草原で少女が裸でうつむいて伏している写真で有名な「森の少女」(1951)や室内の黒い布うえに裸の母親と裸の子供が伏している「指針なき航海」(1957)など5点を購入しました。当時は1ドル300円の時代、作品は一点200ドルでした。今では同じ作品が一点150万円から200万円はします。高くなることであっても絶対に安くなることはありません。そのような世界的な写真家の傑作をオリジナルで見せることは印刷物で見せることの何十倍かの訴求力と説得力があることか、これが本物の写真家を養成する一番の教育だ

と考えます。ウイン・バロック以来、写大ギヤラリーは今日まで180の展覧会を開いています。そのうちの1/3は海外の写真家の場合は本邦初公開という先駆的役割を果たしてきました。写大ギヤラリーは教場として、コレクションは教材として活用されています。

そんな授業を続けているうちに、昭和52年(1977)、「東京写真短期大学」は「東京工芸大学短期大学部」に校名が変更になり、その後、平成6年(1994)には念願の4年制に昇格し、東京工芸大学芸術学部写真学科になりました。その間、私は一貫して「写真芸術学」を教え、それとは別に展覧会の企画、構成、作品収集、渉外を担当しました。作品コレクションは少ない予算でなんとか作家の理解と協力によって寄贈を受けたりしながら予想以上の多くの作品を収集することができました。

4年制になってからは「写真芸術学」は写真学科3年生の選択科目として、同じ中野校舎で教えました。4年制の1年生、2年生は厚木キャンパスがベースで、私は写真学科の2年生を主な対象にして「写真史」を毎週一コマ教えることになりました。この授業は映像学科生もデザイン学科生も申し込めば受けられる授業です。私としては時間的に大変つらいことで、学校だけに集中すると写真家としての仕事がおろそかになり、結果として学生のためにもならないと判断して、2年目からは「世界の写真史」を私が担当し、「日本写真史」を松本徳彦さんを非常勤講師にお願いして分業することになりました。そのため厚木には2週間に一度の授業のために通い続けました。

2年生を教えると学生が3年生になって中野校舎に移ってくると、そこでまた「写

真芸術学」の授業で顔を合わせるし、その後、4年生のゼミを担当するので細江研究室の学生には3年間通しての授業ができる利点があります。それによって学生と教師のお互いの信頼関係も深まり、結果として教育上たいへんいい結果を生むことができました。しかも大学院に進学して研究室を同じくすれば、更に学生への緻密な教育ができます。大学院では博士課程ができて最初から相当突っ込んだ「写真芸術学特論」を教えました。

さて、そんな生活が続いて28年間、大学に籍を置きましたが、2003年3月末をもって教える義務から解放されました。さあ、これから写真家としての細江英公を展させるぞと意気こんだところで、またまた時間が取られることになりました。

70歳までは前だけ向いて作品を作っていたれば良かったのですが、今までの仕事の整理整頓に加えて、種々の写真集の企画や著作の執筆依頼など逆に時間の余裕が少なくなったのは皮肉です。

また、日本各地の美術館を巡回する回顧展の大仕事は大学にいるうちから始まっています。山形美術館、足利美術館、秋田美術館、渋谷松濤美術館、清里フォトアーティミュージムの5つの美術館が主体になり、共同通信社が全体をまとめる代表として、大型の回顧展「細江英公の写真…1950-2000」が待っていました。まず2000年7月、山形美術館を皮切りにして2003年まで全国7か所の美術館を巡回する大規模な巡回展が始まりました。

今度の展覧会で感謝したいことは、5つの美術館の学芸員が関係したおかげで、かつて前例のない極めて資料性の高い展覧会図録が出版されたことです。しかも展覧会

大学の荒井宏子さん(写真保存科学の権威)もその一人で、一年間皆勤で授業を受けてくれました。

ときどき外国からのお客さんを招いて外国の最新情報や写真家の場合は作品のスタイルを見せてもらいながら作家の考え方をどを僕が質問しながら話してもらったことが多々ありました。そして「写大ギヤラリー」で展覧会をしている作家には、ギヤラリーを教場にしてフロアに座ってもらっての授業をしたりと臨機応変に写真家の卵た

の巡回中に図録が売り切れて増刷することがきまった段階で、記事事実の誤りなど初版の正誤表の誤りを全部修正することができたことです。そこで増刷分の図録はほとんど間違いがなくなり、それが嬉しい誤算です。いまや資料性に乏しい展覧会図録はあまり魅力がない時代になりました。

実際の展覧会準備に入ると5人の学芸員が私のスタジオに3日間通い詰めで、スタジオ中のあらゆる資料を点検、収集している間、私は自分のスタジオに出入り禁止ということになりました。その間に息子で助手の賢治が何を出してくれ、あれが欲しいというすべての対応を受け持ちました。ですから5人の学芸員はうるさい私に遠慮することなく、なんでも資料を漁ることができたと喜んでいました。その結果がダンボール25個の資料の山になって運び出されました。5人の学芸員が年代、分野別などのそれぞれの責任担当を定めて細江英公をすっかり裸にしてみました。しかも、海外の美術館、図書館などにも連絡網の輪を広げ、海外での細江英公に関する文献、印刷物などの収集など、徹底的に調査しようとする熱意と真剣さに敬意を表したいと思います。いま大学では学芸員資格をとるための専門授業が組まれていますが、そんな学生に現場を見せたかったと思います。調査対象の本人としてはできる限りの協力をして、「それは持つていくな、とか、あれはダメ」とかの抵抗は一切しませんでした。テレビのニュースなどで見る国税局の一斉立入調査で運び出した調査資料をダンボール100個分運び出したなどというテレビ映像そのままです。お陰で客観性の高い基礎調査をすることができたと喜んでいますが、しかし、一度持ち出した資料などを元の場

所に返すのは至難の技で、わがスタジオは未だに整理整頓ができずに困っています。それでも、過去のことは十分に構っていられます。これから「70歳からの将来計画」を一つ一つ実現させて行かねばなりません。そんな2002年の秋、アスベスト館が

競売にかけられるという不吉な話が耳に入ってきました。アスベスト館とは舞踏の創始者土方巽の目黒の稽古場で、ほくは1950年代から良く通っていたところでした。そこはダンスの稽古だけでなく1960年代、70年代は三島由紀夫、滝口修造、渋沢龍彦、横尾忠則などがよく集っては芸術論を交わっていた昭和の梁山泊で、私も足しげく通った場所です。土方巽や三島由紀夫を撮影したのもそのような時でした。1986年に土方巽が亡くなった後、未亡人の元藤燐子さんが古い稽古場を新しく改装して、舞踏と写真のワークショップを20年近く続けてきたところです。しかも、「舞踏と写真は切っても切れない」と土方巽と私の関係を知っている元藤さんの意向を受けて「写真ワークショップ・コルプス」の教頭を引き受けていました。因に校長は舞踏家の大野一雄先生です。

「アスベスト館が競売なんておかしい、何故だ」。銀行からの借金の返済は毎月返済しているのに何故だ？ 話を聞いて怒った。改装の金を貸してくれた信用金庫が倒産して、アメリカのスター銀行とやらが倒産したその信用金庫を買収して債権者が代わった途端に「前の借金を一括で返済しろ」という話です。それがいやなら担保物件を競売で売る、それを貸した金の一部に当てるという理不尽な要求です。でも、それも合法的なのだそう。そこでほくも含めて友人たちがいろいろと奔走しましたが結局

駄目でした。

未亡人は覚悟を決めたが、このままやぐざみみたいなアメリカの銀行に引き渡すのはなんとも癪だ。だが、ここから多くのエネルギーをもらった写真家として、ほくはこのアスベスト館の最後に臨んでおくべきことは、このアスベスト館から新しい写真を生み出して世界にむけて発表しよう、それをアスベスト館への晩歌と餞（はなむけ）にしようという発想です。

そこで、私がかねてから暖めていた大胆な仮説を、今こそ、この場所から世界にむけて発信する時が来たかと直感したので。その仮説とは「舞踏のルーツは浮世絵」というものです。土方巽は晩年にいたり土方舞踏を『東北歌舞伎』と称しました。私はそれに加えて「浮世絵」を、それも「春画」を加えたいと思います。歌舞伎も浮世絵も庶民の中から生まれた文化です。当時は芸術なんていう概念はなかったでしょうが、庶民の美的水準はすごいものがあつたといまさら敬服します。

この仮説を荒唐無稽だと人は言うかもしれませんが、仮説は否定されなければ仮説として残り、それが証明されれば仮説は定説になります。私は写真家として、その仮説の証明を自分の写真で果たさなければならぬと覚悟しました。

さて、その答が『細江英公の写真劇場・春本・浮世絵うつし』です。この展覧会は2004年3月のニューヨーク展、9月のパリ展に先立って、2003年3月1日〜5日までの5日間、競売で消えてなくなる寸前のアスベスト館で展覧しました。知る人ぞ知るの大盛況で「さらばアスベスト館よ、されどアスベスト館は永遠なれ」の表題のもとに激しく燃えて展覧会は幕を閉じ

ました。

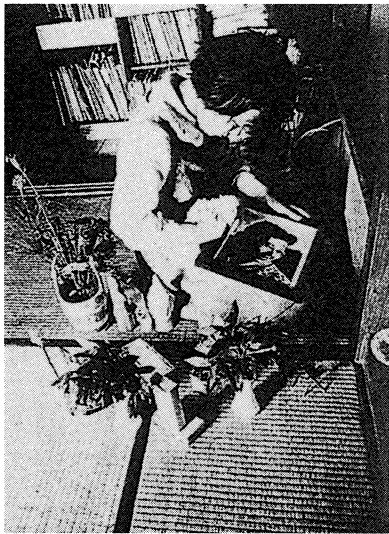
それから1年後のニューヨーク展、続いて9月のパリ展、ミラノ展（時期未定）そして2005年には日本では渋谷の文化村ギャラリー（月日未定）で開く予定があります。

2003年9月には個人的ながら嬉しいことがありました。英国王立写真協会（名代総裁・エリザベス女王）はその創立150年を記念して世界から7人の写真家を選出して、創立150年記念特別メダルを授与したい、ついでにはあなたがその一人に推挙されましたという知らせがイギリスから届きました。受けますかどうかという手紙です。メダルの受賞者は、日頃から尊敬し、敬愛している写真家ばかりでした。受賞者はリチャード・アベドン（米）、ウイリアム・エグルストン（米）、リー・フリードランド（米）、デビッド・ホックニー（英）、ドン・マッカラン（英）、ゴードン・パーク（米）そして細江英公（日）です。

150年前といえば1854年、ペリー艦隊の浦賀沖への二度目の来訪のときに幕府は長い鎖国を解いて開国を決めた年です。周知のとおりその年は、写真的にはきわめて重要です。ペリー艦隊の随行者写真家、E. ブラウン・ジュニアがダグレオタイプカメラをもって下田に上陸しました。そのとき、ブラウン・ジュニアは沿岸警備を担当していた松代藩の佐久間象山と出会い、最初は象山の馬を撮影し、次に象山を撮影したとされています。そのとき象山はブラウン・ジュニアに向かって尋ねました。「その方のカメラで使う薬品はイオデイン（沃素）かクロミウム（クロム）か?」、尋ねられたブラウンはそんな専門的な用語を極東の小国、鎖国の国の役人が知っているこ

おかあさんのばか

写真・細江 英公、被写体と詩・古田 幸



「おかあさんのばか」

少女は母を亡くした。本書の写真を撮ったのも「おかあさんのかわりにくちの中を明るくしなぐちよ思つ」。新ミシン。撮影者がいない間に投稿されたこんな詩が、反響を呼び、映画や生活風景の写真が、詩の歌が作られた。新装の前衛写真家だった細江が、

本書の写真を撮ったのも「おかあさんのかわりにくちの中を明るくしなぐちよ思つ」。新ミシン。撮影者がいない間に投稿されたこんな詩が、反響を呼び、映画や生活風景の写真が、詩の歌が作られた。新装の前衛写真家だった細江が、

間存在に迫ろうとした写真が、まっすぐに届く。四半の時に作品の価値が左右されないのは、極度の精神ゆえだろ

(巻社・二二〇円)

「おかあさんのばか」 京都新聞2004年10月10日より

とにたいへん驚いたという逸話がアメリカにのこされています。

その年、日本人が初めて日本で外国人によって写真撮影された記念すべき年です。イギリスでは写真発明年の1939年、フォックス・タルボットがカロタイプをロンドンで発表、その14年後にロンドンではヴィクトリア女王を名誉総裁にして世界で最初の写真協会「英国王立写真協会」が創立されています。フランス写真協会はその翌年に設立されました。このような歴史を知るものとして、この度の英国王立写真協会からの授賞をたいへん名誉なことと思っています。

話はかわって、2004年6月には40年ぶりの別の感動を味わいました。東京オリピックの熱風が去ったあとの1965年、小学5年生が書いた詩『おかあさんのばか』

に感動した私は、その詩を書いた少女の古田幸(みゆき)ちゃんを被写体にして、お母さんを亡くした少女の悲しみ、そして、ひたむきに生きる健気な少女を本人の詩を添えて写真集にしました。講談社インターナショナルからの英語の写真集『Why, Mother, Why?』

です。この本はアメリカを中心に英語圏の読者向けに出版されたのですが日本語版の出版はありませんでした。それから40年が経ちました。たまたま『細江英公・私の写真史』を出版するために資料を見ていた(株)窓社の西山俊一社長が英語版「おかあさんのばか」をみつけて「これは今こそ出すべき本だ」という鶴の一声で日本語版が40年を経て初めて出版されたのです。

いま、小学生が同級生をナイフで殺す、親が子を殺すなど殺伐な時代、家庭の絆が薄くなっている時代こそ、この『おかあさんのばか』は多くの人達に読んでほしい本だからという西山社長の言葉に動かされ出版する気になりました。いままでの多くの写真集ではもたらなかったことのない手紙を読者から沢山いただきました。『涙が止まらなかつた。写真って凄いな』『写真と少女の詩が溶け合っている、こんな写真集を初めてみた』等々……。朝日新聞の生活欄で写真集の記事が出たとたんに出版社の方には電話が鳴

りやまなくて500通の電話がかかってきたとききました。お陰で出版から1か月もしないうちに重版がきました。

2004年、今年は海外出張が多かった年です。3月3日〜7日には国際審査員としてアルル賞の第一次審査のためにパリへ。同じ3月16日〜21日は「細江英公写真劇場・春本・浮世絵うつし」展のオープニングに出席、18日ははくの71歳の誕生日、20日は同伴の妻ミサ子の誕生日ということでダブルお祝いのパーティーで大いに盛り上がりました。モスクワから前衛写真家のチエルカシン夫妻、ロチェスターからネーサン・ライオンズ夫妻、地元ニューヨークからはラルフ・ギブソン、ブルース・ダビッドソンらが集まり同窓会の気分でした。

7月はアルルで本審査と授章式に出席しました。初めての日本人審査員として日本人写真家を候補者として推薦しました。ニユー・デスカバリー賞には京都造形芸術大学教授の鈴鹿芳康氏(本学客員教授)が1位の金賞を獲得しました。これは凄いことです。無制限の部では森山大道氏(本学客員教授)を推しましたが惜しくも一票差で2位になりました。また、「2004年のベスト写真集」でも森山大道を推しましたが、残念ながら、これも一票差で2位にとどまりました。だが2位といつても500冊のなかの2位ですから大いに誇っていいと思います。写真集「新宿」が入賞しました。

9月はパリの写真画廊・アクテ・デュで「春本・浮世絵うつし」の個展、オープニングにはポルドー在の舞踏家・カルロッタ・池田が音楽、照明のスタッフをつれてきて踊ってくれました。また、カリフォルニアから同じく舞踏家でモデルになつてくれた玉野黄市が飛んできて踊ってくれました。

オープニングは大賑い、さすがのパリの紳士淑女たちも肝をぬかれたようです。

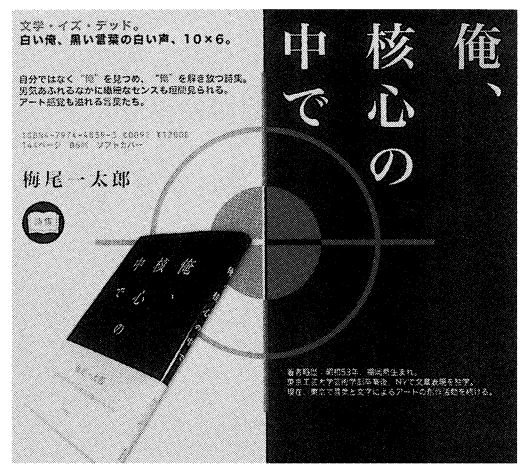
10月は「11人の写真家と一本の葡萄酒」という写真集の出版記念会と展覧会のオープニング・パーティーがあり、そこに出席をした後、ナポリとポンペイへ行きます。ミラノの写真集とは、カデルボスコという名門のワイナリーの社長が11人の写真家を選び、ロンバルディアの壮大なぶどう園へ招待して好きなように写真を撮って貰い、それぞれの写真を収録して写真集としてまとめ、同時に展覧会をするという企画が10年前にあり、それが今年ようやく完成したというものです。参加写真家は日本からは細江英公、ベルリンからヘルムート・ニュートンと奥様の写真家・アリス・スプリング(ただし写真集の編集集中にニュートンが亡くなったので参加写真家全員の気持ちとして写真集の献辞をニュートンへ捧げることを決めた)。ロンドンからドン・マツカラ、ニューヨークからラルフ・ギブソン、イタリアからはフランコ・フォンタナ他6名が参加しました。たまたまこの時期にナポリとポンペイに行く仕事があり、絶妙なタイミングです。ナポリ市の委嘱でポンペイの遺跡を撮るというのですが、風景写真家ではない人間写真家・細江英公に大胆にも公的機関が異色の撮影依頼をするというところに胸が躍ります。こちらにはこちらの企てがあるのでその打ち合わせとロケハンにポンペイ、ナポリ、そしてローマの舞踏家と打ち合わせをする予定になっていきます。ナポリ市はイタリアの写真家になんか日本人の私に期待しての委嘱だろうと解釈して、100%細江英公流の写真をナポリ市に提供するつもりでいます。

平成16年10月

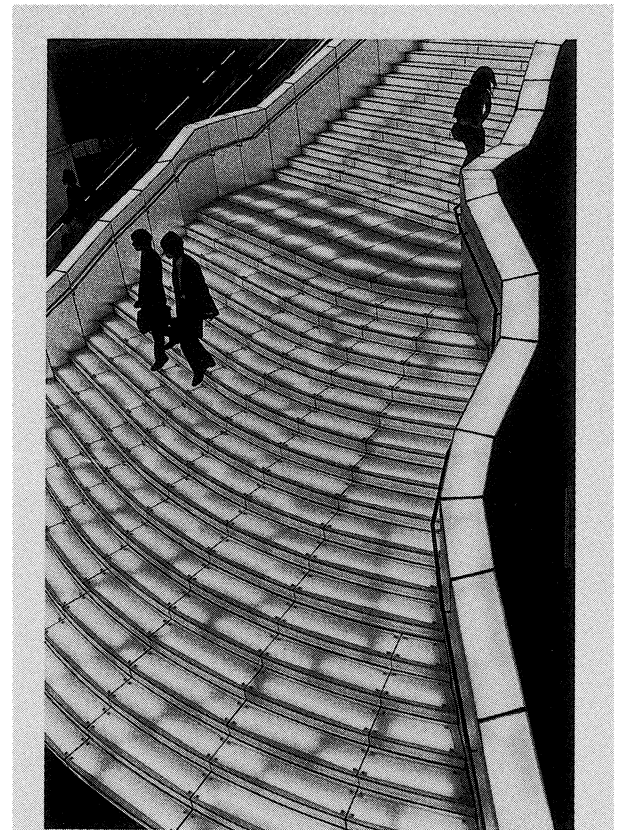
著書「俺、核心の中で」
東京青山新風舎・発行

著 梅尾一太郎氏
(78期・芸術学部映像学科)

梅尾氏は、昭和53年福岡県生まれ、東京工芸大学芸術学部映像学科卒業(平成15年3月)後、NYで文章表現を学び、現在、東京で言葉と文字によるアートの創作活動をしている。



写真展
「垂直状の、(領域)・04」
2004年12月7日～19日(日)
東京港区青山「DAZZLE」
プロフィール
1947年 神奈川県生まれ
1975年 写真集「垂直状の、(領域)」を上梓
1979年 島尾伸三、金子隆一らCAMERA WORKSの活動を開始
1979年～95年 写真同人誌「camera works

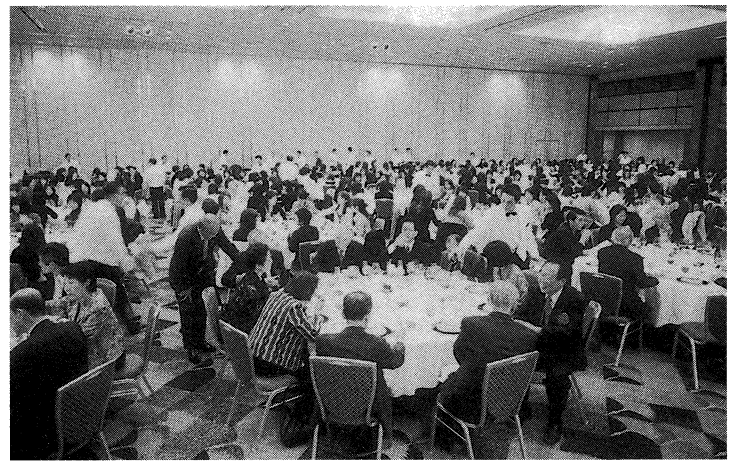


HITOSHI TSUKIJI PHOTOGRAPHIC EXHIBITION
"Vertical,(DOMAIN)・04"
DAZZLE 12.7 Tue. ▶ 19 Sun. 2004

- 1985年 日本写真協会新人賞を写真集「写真像」で受賞
- 1997年～98年 「アサヒカメラ」誌で「クラシックレンズ・コンテスト」を選評
- 作品は、東京都写真美術館、川崎市民ミュージアム、東京国立近代美術館、東京工芸大学写大ギャラリー、米プリンス頓大学美術館などに収蔵。
- 展覧会歴
 - 1977年 「方向量」フォトギャラリーブリズム(東京)
 - 1984年 「母型都市」ポラロイドギャラリー(東京)
 - 1984年 「写真像」ツアイトフォトサロン(東京)
 - 1987年 「写真像(84,1986)」ピクチャーフォトスペース、都ギャラリー(大阪)
 - 1992年 「築地仁写真(1992,1984)」ピクチャーフォトスペース(大阪)
 - 1993年 「単子MONADE」ツアイトフォトサロン(東京)
 - 1993年 「単子II MONADEII」ピクチャーフォトスペース(大阪)
 - 1995年 「モノ・カオ・反物語」東京都写真美術館
- 1997年 「空襲都市Kusoutoshi」The Third Gallery Aya(大阪)
- 1998年 「築地仁の現在(なげ・いま・ここ)1974～1981」東京工芸大学写大ギャラリー(東京)
- 2002年 「都市の境界 Motherpolis [E2]」ギャラリーアートクラフ(東京)
- 2002年 「3人展 掌の宇宙」DAZZLE(東京)
- 「Sine Line (of) the 築地仁十橋本恵美子」ポラロイドギャラリー(東京)
- 「垂直状の、(領域)・03」DAZZLE(東京)

華輪会東京工芸大学女子短期大学部同窓会
華輪会20周年記念総会・
講演会・祝賀会
平成16年10月23日(土)
東京赤坂・ホテルニューオータニ

同会の20周年記念祝賀会に本会の田沼武能会長ほか役員が招待され、お祝いをいたしました。



左から、加藤理事長、奥田副会長、田沼会長、宮永悦子華輪会会長、大澤副会長

37期(写真工業科)クラス会

平成16年12月6日(月)
横浜中華街にて

横浜港でクルージング。そして中華街でパーティをしました。
歳をとると友達に会うのが一番ですね。今度は中野キャンパスで元気にお会いしましょう。
幹事長・井形泰幸(37期)



「芸術別科の一年間」

ご紹介

堀江真雄氏は、昭和33年東京写真短期大学写真工業科卒業(33期)、新潟フジカラ(株)社長を永く勤められ、そして本会新潟県支部長として活発な活動をしておられます。

堀江氏は、平成15年4月より16年3月まで1年間芸術別科で写真制作を学ばれました。修了後は、支部長として支部をまとめ、また、写真展を開催するなど活動しておられます。(37期・阪川武志)

自己紹介から入ります。

昭和11年、新潟県三条市の菊池写真館の次男として生まれる。結婚して堀江となる。写大33期写真工業科卒で測光研究室で穂積教授の指導を受けました。

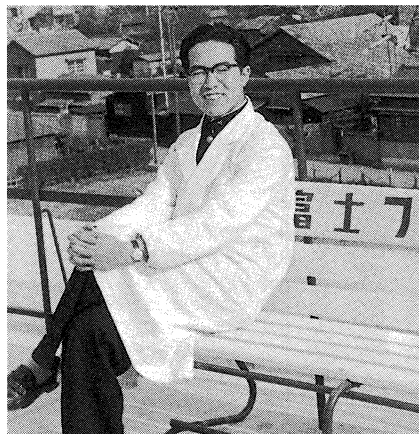
卒業後はカラー映画の現像所である「株式会社・東京現像所」で3年半勤め、その後穂積教授の推薦で航空測量の「株式会社・国際航業」に3年勤務しました。

昭和39年に新潟フジカラ現像所を設立することになり、設立の準備に参加して以来40年勤務し、社長退任後1年間の相談役も退任して完全にフリーになりました。

又、東京工芸大学同窓会・新潟県支部長をここ10年間やっておりますので支部の現状を報告させていただきます。

初代支部長は1期卒業の卒業証書第1号の朝倉良三氏、2代目は7期卒の小熊義人氏で92歳でお元気でおられます。3代目は

新潟県支部長 堀江 真雄 (33期)



昭和33年3月の私

15期卒の小林実氏、4代目は21期卒の長谷川健作氏、そして5代目が私です。現在の会員は149名で4年前より工学部卒業生も入会してもらいました。毎年欠かさず支部総会を開催し今年も35回になります。

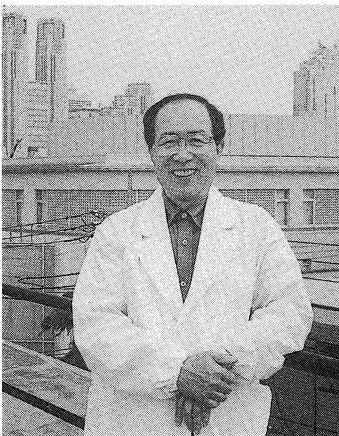
新潟県支部の活動としては平成元年に写真誕生150年記念として東京工芸大学・写大ギャラリーコレクション・世紀の一流写真家による「オリジナルプリント展」を新潟伊勢丹で開催し、更に平成12年に新潟県支部創立30周年を記念して写大ギャラリーコレクション「20世紀の写真・海外有名作家によるオリジナルプリント展」を細江教授、新潟県支部の特別会員である阪川教授と写真センターの吉村助教はじめ諸先生のご協力で開催する事が出来ました。新潟県民の多くの方に素晴らしいオリジナルプリントを鑑賞していただき大変に喜んでおります。

さて本題に入りますが、昨年の4月から1年間芸術学部別科に入学いたしました。入学試験は小論文「写真と私」と自作の数点の写真と面接でしたが入学許可ができました。当大学の卒業生であることから手心を加えていただいたと思っております。

「なぜ芸術別科で勉強しようと思ったか」と多くの人に聞かれますが、それは私が写大で学んだ期間はたったの2年間で一般教養と専門科目そして2年目には研究室での教育と就職活動で相当に詰め込んだ内容であり、あつという間に卒業した記憶があります。せめて写大の前身の写真時代のように3年間あればもっとゆとりもあり楽しかったのではと残念に思っていたことが頭の片隅にありました。

それともう一つは28歳で新しく発足する会社の社員1号として責任を持たせられ、それ以来40年間仕事一途にやってきましたので悲しいかな、自分から仕事を取ったら何も残っていない状態であると認識しました。「会社経営とは預かりもの」が私の信条でしたので65歳までにやるべきことをやり、キチント仕事を辞めるためにもこれからの人生のプランニングが必要でした。

そこで今までの生活から完全に切り離すためには新潟から離れ東京でアパートを借



平成15年6月の私

りて学生に戻り、撮影の勉強しようとして芸術別科に入学を考え、自分の新しい道にチャレンジしてみようと決心しました。

今までは他の人の写真をプリントすることが仕事でしたので自分の作品を創ることには疎く頭が回りませんでしたので芸術別科に入学してからは大変に戸惑いました。「貴方は何を撮りたいのか」と聞かれても答えられませんし、対象とするものの撮影が出来ても「何を表現したいのか」と聞かれても答えることが出来ませんでした。それでもがむしゃらに撮影をして先生にご指導をいただいている内に「何か」が見えてきました。

芸術別科のクラスメートは男子6名、女子8名の14名で私が一番の年長者と覚悟して入学しましたら私より10歳以上も年長の方がおられました。大変にお元気で写真がとてうまくJPS展で何回も奨励賞を取っておられる方で、この一年間親しくお付き合いをさせていただきました。

他のクラスメートは他の大学を出て、どうしても写真をやりたいと意欲をもって入



平成16年3月芸術別科修了制作展（東京新宿ニコソロン）にてうしろは、堀江氏の作品

又、クリテックと称して全員が課題にもとづいて制作してきた5枚以上の組写真を大きな机に並べてお互いに評価する時間があります。自分の写真が皆の前で評価されるのですから厳しいものですがその中で若い人の素晴らしい感性に感嘆し多くの刺激を受けたのも大きな収穫でした。一口に言っても大勢の若い人の中に入って一年間勉強できたことは素晴らしい経験であり、非常に満足しています。

芸術別科の一年でのもう一つの収穫は46年前に書いた卒論を手に入れたことです。それは穂積教授のあとを引き継がれた田中教授の研究室にお邪魔して南博君と内藤康夫君と私

学してきた人たちが20歳代の前半の若い人達です。その若い人たちと写真の話や一緒に飲み会をやったりして大変に楽しいキャンパスライフを送る事が出来ました。

阪川教授、田中教授、金子教授、足立助教授の講義も我々が共立出版の教科書で難しい講義を受けた記憶と異なり、分かり易く簡潔にまとめられた資料にもとづいての講義でしたのでとても分かり易く、50年前に受けた授業を思い出しながらの楽しい授業でした。吉村助教授の写真制作特論も現在活躍しておられる写真家をお招きして実技を交えてのお話を伺い大変に面白い授業でした。

写真制作技術と写真演習では平野先生、上条先生、栗津先生、井堀先生のご指導で大型カメラによるストロボライティングを含めた人物撮影、アオリを使った商品撮影とネガ現像、引き伸ばし操作、仕上げ額装までの実技指導を受けとても楽しい授業でした。

三人の共同研究の卒論を保存してあったら見せていただきたいとお願ひしたら、何と棚の多くのダンボールの中から見つかったらくださるとの事でした。そこで日を改めて教時間をかけて無事探し出すことが出来ました。研究題目「Color Sensitivity (カラー写真再現の測定及び表示方法の考察)」A4レポート用紙122ページでカラーポジがメーカーにより変色の差がありましたがレポート用紙が多少色が変わっている程度で厚手の茶袋から出てきた時はすばらしい宝物を手に入れた喜びでいっぱいでした。

芸術別科の一年間の作品テーマは二つあって、メインテーマは「DocMoBiルの見える街」でサブテーマが「光と形のコラボレーション」です。メインテーマの

「DocMoBiルの見える街」は新宿のニコソロンで3月に開催された別科の修了展に全紙9枚を一組にして展示しました。そしてこの9月に新潟市の中心地にある同期の各務弘君の経営するカガミ写真機店に展示しました。

サブテーマが「光と形のコラボレーション」は私の初めての個展として新潟フジカラー映像センターにおいて9月16日から10月2日まで半切3枚と四つ切20枚で展示し、90歳になる母の折り紙と妻の生け花も合わせて展示して「堀江家三人展」となりました。

「透明な光の中にな何がある 自分の世界を捜し求め一歩踏み出してみた」と言うのがこの写真展を通じてこれからの私の課題でありチャレンジだと考えております。

堀江真雄写真展「光と形のコラボレーション」

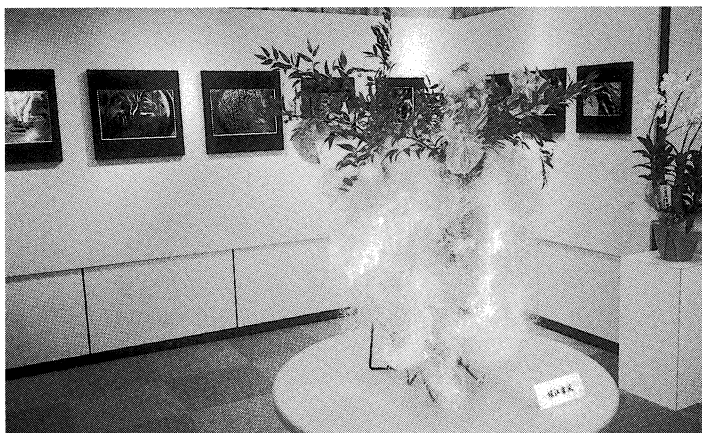


会期/平成16年9月16日(木)~10月2日(土) AM9:00~PM6:00(夜間日休)

会場/新潟フジカラー映像センター 1Fギャラリー

新潟市南役口1-2-16 CDビル TEL:025-246-7241

後援/富士写真フイルム(株)・(株)新潟フジカラー



修了後に新潟市で開催した写真展「光と形のコラボレーション」平成16年9月16日~10月2日。新潟フジカラー映像センターギャラリー

東京工芸大学

「平成16年度 芸術学部 卒業・大学院修了 制作展」

開催のお知らせ

平成17年2月
東京工芸大学芸術学部
卒業制作展実行委員会

東京工芸大学では「平成16年度 芸術学部卒業・大学院修了制作展」を下記概要にて開催いたします。今年度は、学科ごとに4会場を設けて同時開催いたします。各会場とも、入場無料、事前予約等は不要です。卒業生たちの学生生活の集大成となる作品にご期待ください。

記

開催期間

2005年
2月25日(金)・26日(土)・27日(日)
連続3日間
開場時間11:00 am - 19:30 pm
※最終日のみ17:00 pm終了

学科別開場

●写真学科 卒業制作展会場
モータポリティカ(港区南青山6-6-21)
交通/銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」B1出口より徒歩10分

●映像学科 卒業制作展会場
東京工芸大学 芸術情報館(中野区本町2-4-7)

交通/丸の内線・都営地下鉄大江戸線「中野坂上駅」下車、1番出口より山手通りを渋谷方面に進み、本町2丁目交差点を右折

●デザイン学科 卒業制作展会場
ラフォーレミュージアム原宿(渋谷区神宮前1-11-6 ラフォーレ原宿6F)

交通/千代田線「明治神宮前」5番出口より徒歩1分

または、JR山手線「原宿」より徒歩4分
●メディアアート表現学科
卒業制作展会場

オリベホール(港区六本木6-1-24
ラピロス六本木8F)

交通/日比谷線・大江戸線「六本木」駅下車、六本木側3番出口から直結
●芸術学研究所メディアアート専攻
修了制作展会場

各領域に分かれて右記の会場にて実施致します。

お問い合わせ

中野キャンパス学生課
03-5371-2674
URL ● <http://www.tkougei.ac.jp>

会員の皆様

「同窓会沿革史」編集 よりお知らせ

編集委員会 阪川武志(37期)

われわれ同窓会は、創立75周年をこえ、間もなく80年を迎えます。現在、本会の長い歴史をまとめる沿革史を編纂中です。会員の皆様に下記のことからについて執筆ご協力をお願い申し上げます。

①思い出の写真のページ

皆様が学生のころ、卒業のころの思い出の写真がありましたら、1枚ご提供下さい。貴重な写真ですので、コピーしたものをお預け下さい。

②思い出の記事

「私が学生のころの思い出」または「私が卒業したころの思い出」をテーマに、原稿を執筆して下さい。

文章 800字以内

写真・イラストなど必要に応じて1枚

筆者のポートレート1枚

たくさんのお投稿をお待ちします。

③支部長の方へ

支部活動の発足から現在までの沿革をお書きください。

文章・いちょうの目安を3000字までと

しますが、特に制限しません。

写真・イラストなど必要に応じて数点まで。

支部長のポートレート1枚

可能な限りお願いします。

④全会員の皆様へ

同窓会の年表を作成します。内容は東京工芸大学の年表とイメージが異なりますが、そこに、本会が「何年に何があった」かを記載した形にしたいと思います。

皆様の卒業に、あるいはその後、同窓生の関係することで「何年に何があった」のピンポイントの情報を下さい。

■お送りいただく方法

- ①は、できるだけコピーした写真プリント(銀塩、デジタル)をお送り下さい。
- ②③は、原稿用紙にお書きいただき、写真と共に送り下さい。できれば横書きとしますが、縦書きでも結構です。
- ④は「はがき」かFAXでお送り下さい。

■送り先

郵便 〒164-8678

東京都中野区本町2-9-5

「東京工芸大学芸術学部」

同窓会沿革史・阪川武志 へて

FAX 3372-1330

(工芸大学 代表FAX No.)

「同窓会沿革史・阪川武志」へて

てお願いします。

お送りいただく期限

平成17年3月6日

どうぞよろしく願います。

沿革史編集委員会

加藤 春生(34期)

阪川 武志(37期・委員長)

池田 陽子(39期)

花川 正英(44期)

坂上 恒之(51期)

糸賀 成永(56期)